



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	キャリアCAMIによる大学生・専門学校生の職業意識の類型化：類型化とその特徴
Author(s)	島袋, 恒男; 廣瀬, 等
Citation	琉球大学教育学部紀要(65): 151-160
Issue Date	2004-09
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2134
Rights	

キャリア CAMI による大学生・専門学校生の職業意識の類型化 — 類型化とその特徴 —

島袋 恒男・廣瀬 等
(教育心理学)

A Study on Career Development of University and
Vocational School Students.

Tsuneo SHIMABUKURO Hitoshi HIROSE
(Educational Psychology)

1. はじめに

CAMI (Skinner, 1988 : 1993) とは目標達成への統制感 (Control Beliefs), 達成のための手段保有感 (Agency Beliefs), 達成のための他者の手段の認識 (Means-Ends Beliefs) の頭文字に Interview の I を加えたものである。様々な目標に関する研究においてこの枠組みが応用されている (Skinner, 1993 : 唐沢ら, 1994 : 島袋ら, 1996)。達成への統制感とは目標達成への自信・意欲のあり方に関係し, 手段保有感や手段の認識はそれを支える土台になっていると考えられる。キャリア CAMI とはそれを学生の職業的発達や就職という目的に応用したものである。

島袋・井上 (1996) は, 初めてキャリア CAMI 尺度を作成し, 因子分析によってその構造を経験的に確認している。その結果, キャリア CAMI の 3 つの側面は, 達成への統制感では①就職への無力感, ②就職への統制感, ③就職への現実的統制感に, 手段保有感は①努力の保有感, ②人的支援の保有感, ③運の保有感, ④運の非保有感, ⑤能力・適性の保有感, ⑥人的支援の非保有感, ⑦能力・適性の非保有感に, さらに手段の認識は①手段の認識「努力」, ②手段の認識「未知の原因」, ③手段の認識「運」, ④手段の認識「人的支援」, ⑤手段の認識「能力・適性」, ⑥手段の認識「人的支援と努力」, ⑦手段の認識「景気」に分類された。さらに 3 側面の関係は相関係数によって検討され, その結果, 就職への統制感の背景には努力の保有感, 人的支援の保有感, 運の保有感, 能

力・適性の保有感があり, 就職への自信・意欲の高い学生は就職に当たって肯定的な自己理解をしていることが示された。そしてそのような自己理解は, 就職に当たっての一般的手段の理解として, 努力, 能力, 人的支援の役割の理解のあることが示された。反対に, 就職への無力感, 運の非保有感, 人的支援の非保有感, 能力・適性の非保有感という自己理解が関与しており, その後ろには就職は一般的に運に左右されたり分からないという認識が関わっていることが明らかにされた。

岸本 (2002) は, 島袋・井上 (1996) の結果を受け, 大学生の就職が一段ときびしくなった時代状況での大学生・専門学校生の就職への統制感, 手段保有感, 手段の認識の尺度を別々に因子分析を実施し, それぞれ統制感では①「就職への無力感」②「就職への統制感」, 手段保有感では①「努力の非保有感」②「運の非保有感」③「能力・適性の保有感」④「友人の支援の非保有感」⑤「大学の支援の非保有感」, 手段の認識では①「未知の原因」②「運の認識」③「能力の認識」④「努力の認識」⑤「支援の欠如の認識」を抽出している。島袋・井上 (1996) の結果と比較して, 「努力の保有感」が「努力の非保有感」に代わり, 手段の認識が現実的でない学生が目立ち, また手段の保有感では「能力と適性の保有感」だけが顕著であり, 現実的な「他者の支援」や「努力の保有感」を持ちにくいことを問題として指摘している。以上のことから学生の職業的発達や就職への意識や動機のあり方を検討し, 学生の進路指導を考え支援していく必要性が高いと言える。

ところで、望月（1991）は中学生から大学生までの職業的発達を自我発達と関連づけて統合的に理解しようと試みている。職業的発達を勤労観の形成として位置づけ、青年期でのその推移を捉え、その推移を個人の自我発達の中に位置づけている。職業的発達の項目は因子分析の結果、第1因子は勤労効果の自覚を中心とした「職業的自己実現志向」、第2因子はより基本的な行動効果・仕事の効果に直結する「社会的職業的役割の検討」、第3因子は日常生活での有能性や協力的性の発揮、役割、達成の役割の自覚を中心とする「社会的評価基準の理解」が得られている。そして、それぞれの因子得点の2分割に基づく高・職業的自己実現志向の4グループ（累計）－仕事調和型、役割模索型、評価基準確立型、仕事遊離型を中学生から大学生まで比較すると、年齢の増加に従って高・職業的自己実現志向が増加し、低・職業的自己実現志向が低下していくことが確認された。還言すれば、中学生から高校生、大学生にかけて次第に「社会的評価基準の理解」が進み、「社会的職業的役割の検討」ができるようになり、そして「職業的自己実現志向」が高まっていることを示していた。キャリア CAMI で捉えられる就職への達成感（無力感）、手段保有感および手段の認識のあり方も職業的発達と深く関係することが予測できる。

本研究では、第1に CAMI の12個の因子間の関係を変数クラスター分析で検討し、就職への統制感（無力感）に至る手段保有感や手段の認識の流れ（パターン）の特徴を探るのを目的としている。果たして学生の就職への統制感はどのような手段の保有感と認識に支えられているであろうか。反対に、就職への無力感はどのような手段保有感と手段の認識に左右されているであろうか。またそのパターンは望月（1991）の職業的発達の因子をどのように反映するだろうか。第2に12個の因子で個人間の距離を算出し、類似した個人を分類するサンプルクラスター分析を行いキャリア CAMI での学生の類型化を実施する。類型化された各グループは手段の認識、手段保有感、就職への統制感でどのような特徴を示すであろうか。

また沖縄県の大学生・専門学校生の職業的発達尺度の特徴を把握し、次いでキャリア CAMI に

よる先の学生の類型化（個人差）と職業的発達尺度との関係と、及び学生の今現在の就職に向けての努力の過程（相互作用）が実感（現実感）の伴ったものになっているかどうかについて検討する。

2. 方法と手続き

- 1) 調査対象者：沖縄県内の大学生、専門学校生 238名が本研究の調査対象者である。その性別内訳は、男子132名、女子106名であり、大学生が163名、専門学校生が73名である。
- 2) 調査尺度：「キャリア CAMI 尺度」（島袋、1996）60項目、「職業的発達尺度」（望月、1991）33項目及び「非現実感尺度」（須永、1995）20項目をそれぞれ5件法で回答させた。それに「将来の希望職業」「希望職業の強さ」の2項目とデモ要因を加え、自由記述と4件法で回答させた。
調査は2002年6月であり、青年心理学、カウンセリング、心理学の講義で実施した。

3. 結果と考察

1) キャリア CAMI 因子による変数クラスター分析

図1は先に確認された CAMI の12個の因子間の関係を変数クラスター分析で示したものである。その結果、変数クラスターは大きく分けて2つのグループに分かれることが分かる。第一のグループは「就職への統制感」を中心としたものであり、その近くに「能力・適性の保有感」があり、そして「能力の認識」と「努力の認識」「支援の欠如の認識」が位置している。第2のグループは「就職への無力感」を中心として、その近くに「努力の非保有感」「運の非保有感」が位置し、さらにその近くに「運の認識」「未知の原因」が位置し、「友人の支援の非保有感」「大学の支援の非保有感」が位置している。この様な結果から学生の就職への自信・意欲の高低に、手段の保有感のあり方が大きく関係し、更に手段保有感は一般的な他者の就職への手段の認識によって方向づけられていることが分かる。

つまり大学生・専門学校生の希望通り就職がで

きるといふ「就職への統制感」は自分には就職に向けての能力や適性が備わっているという「能力・適性の保有感」のみで支えていることが分かる。そしてその反対に自分は希望通り就職ができないという「就職への無力感」は将来の就職に向けての行動や活動ができないという「努力の非保有感」に方向づけられていることが分かる。そのような自己理解の背景には、就職に向けての他者の手段の理解である「能力の認識」「努力の認識」があり、努力の役割は理解されているにもかかわらず、「努力の保有感」を形成できないことが示されている。また周りの人の支援の理解に関係する「支援の欠如の認識」がこのグループに含まれていることから、周りの人の就職に向けての支援の役割は理解されておらず、就職は本人の能力と努力の問題と認識されているようである。望月 (1991) の職業的発達への「職業的自己実現志向」に対応するのがこのタイプであると予測できる。しかし、努力の保有感の裏付けが弱いことから、能力・適性の自己理解が問題となるであろう。具体的な能力や適性の自己理解が成立していれば、職業的発達につながるということが考えられるが、漠然とした「能力・適性」の自己理解ならば職業的発達はおぼつかないと予測される。

そして、「就職への無力感」は直接的には「努力の非保有感」に基づいている。また「運の非保有感」「友人の支援の非保有感」「大学の支援の非保有感」もこのグループに含まれており、就職に向けての一切の保有感を形成できないのが「就職への無力感」の特徴である。加えて就職における他者の手段は「運」であり「未知の原因」である。このように他者の就職における能力や努力そして他者の支援の役割を理解できないのがこのグループの大きな特徴である。

いずれにしても大学生・専門学校生は将来の就職に向けての「努力」を形成していないと言える。多分に調査対象者に1・2年生の多いことも関係しているだろうが将来の職業や就職に無関心な学生が多いことがこのような結果につながっていると考えられる。多分に、将来の目標に向けての高校までの学習ではなく、大学入学が目的となって学習する傾向が強いため、職業や職業達成に関して十分な情報がかけている可能性がある。そのよ

うな結果から、このパターンは職業的発達が欠如していると予想される。

キャリア CAMI によるサンプルクラスター分析も、統制感（無力感）の手段保有感と手段の認識の程度に応じて類型化されることが予測される。

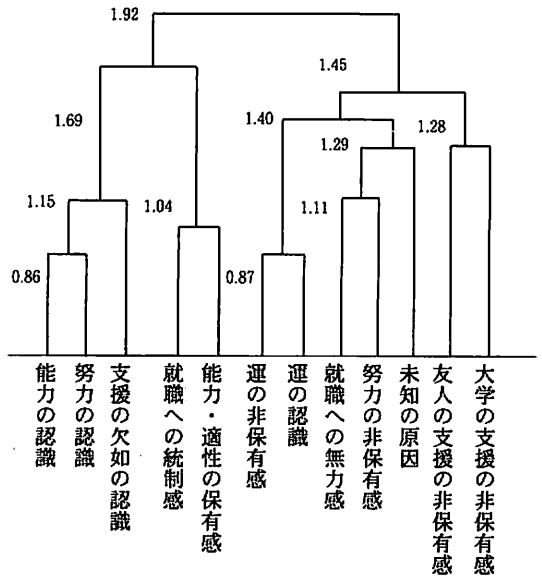


図1 変数クラスター分析の結果

2) キャリア CAMI によるサンプルクラスター分析

次にキャリア CAMI の12個の因子に基づいて、被調査者間の距離を算出し、類似した個人を分類するサンプルクラスター分析を実施した。その結果、全被調査者は5つのクラスターに分けることが可能であった。CL1, CL2, CL3は相互に距離が近く、またCL4, CL5も相互に距離が近かった。大きく分けて学生は2つのグループに、細かく分けた場合は5つのグループに分かれている。そして、各クラスターの人数（比率）はCL1 = 85人 (40.0%), CL2 = 21人 (10.0%), CL3 = 42人 (20.0%), CL4 = 28人 (13.0%), CL5 = 39人 (18.0%) となりCL1に属する学生が最も多かった (図2)。

5つの各クラスターの特徴を明らかにする目的で、各12個の因子を従属変数とし、5つのクラスターを要因とする一元配置の分散分析を実施した。表1にその結果を示す。

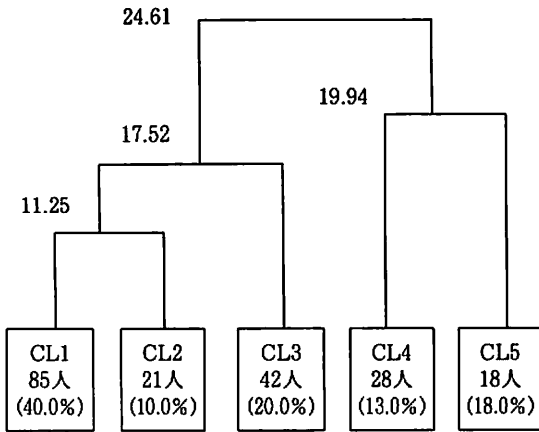


図2 サンプルクラスター分析の結果

表1の結果から、CL3は「就職への統制感」が最も高く、「就職への無力感」が最も低いグループである。同時に「努力の非保有感」「友人の支援の非保有感」が最も低く、反対に「能力・適性の保有感」が最も高いグループである。そして手段の認識では、「未知の原因」「運の認識」が低いという特徴を示している。それとは反対にCL5は、「就職への無力感」が最も高く「就職への統制感」が最も低いグループである。手段保有感では「努力の非保有感」「運の非保有感」「友人の支援の非保有感」「大学の支援の非保有感」の得点が最も高く、「能力・適性の保有感」が最も低いグループである。加えて手段の認識では、とりわけ「未知の原因」「運の認識」の得点が高くなっ

表1 サンプルクラスター間のCAMI因子の比較

CAMI		クラスター	CL1 85(40%)	CL2 21(10%)	CL3 42(20%)	CL4 28(13%)	CL5 39(18%)	F値
就職への無力感	平均		6.5	5.0	4.2	5.8	8.1	40.85***
	順位		2	4	5	3	1	
就職への統制感	平均		11.1	10.2	12.0	9.0	8.8	32.4***
	順位		2	3	1	4	4	
努力の非保有感	平均		-7.9	-8.0	-10.0	-6.5	-4.8	21.30***
	順位		3	3	4	2	1	
運の非保有感	平均		10.0	6.7	7.2	8.6	12.9	51.98***
	順位		2	4	4	3	1	
能力・適性の保有感	平均		5.8	2.0	8.8	4.2	4.2	25.58***
	順位		2	4	1	3	3	
友人の支援の非保有感	平均		-0.80	.50	-1.5	-.50	.60	12.45***
	順位		5	1	4	3	1	
大学の支援の非保有感	平均		-5.9	-6.7	-5.7	-5.1	-4.1	8.06***
	順位		2	3	2	2	1	
未知の原因	平均		13.2	9.5	10.3	11.8	13.7	13.52***
	順位		1	3	3	2	1	
運の認識	平均		10.9	6.2	9.2	8.7	12.6	20.03***
	順位		2	4	3	3	1	
能力の認識	平均		31.9	34.9	30.6	25.6	32.1	18.58***
	順位		2	1	2	3	2	
努力の認識	平均		24.4	25.5	24.1	18.6	23.6	26.14***
	順位		1	1	1	2	1	
支援の欠如の認識	平均		19.0	18.6	16.3	13.6	18.4	20.31***
	順位		1	1	3	4	1	

***P<.001

ている。その亜流が CL4 のグループと思われる。最も人数の多かった CL1 は、CL3 の亜流と思われる。「就職への統制感」も「就職への無力感」もどちらもやや高いグループである。「友人の支援の非保有感」は低い、「能力・適性の保有感」「運の非保有感」がやや高いグループである。先に予測したように、サンプルクラスター分析でも「就職への統制感」と「能力・適性の保有感」を中心として将来の就職を考える学生と、反対に「就職への無力感」と「努力の非保有感」「運の非保有感」「友人の非保有感」および「大学の支援の非保有感」を中心として将来の就職を考えている2つのグループとその亜流のグループの存在が明らかになったと指摘できる。注目すべき結果は、いずれのグループも就職に向けての「努力の保有感」の意識が弱いことである。まだ大学や専門学

校に入学して、将来の「就職」ということに関して具体的にどのように考え、どうしていいのか分からないということに関係しているかも知れない。がしかし、「能力」のあるなしという漠然とした自己理解をしている可能性もある。

3) サンプルクラスターと職業への希望の強さの差, 性差, 学年差

サンプルクラスターの特徴を別の視点から検討するために、その希望職業の強さ, 性差, 学年差についてクロス集計を行い χ^2 検定を施した。表2, 表3, 表4にその結果を示す。

職業の希望の強さとクラスターは明らかに関係している ($\chi^2=22.16, p<.001$)。つまり強い就職希望を持っている学生は、そうでない学生に比較して、CL3 (27.7% vs 9.1%), CL1 (43.6% vs

表2 クラスターの職業希望の強さの差

希望度	クラスター	CL1	CL2	CL3	CL4	CL5
		85(40%)	21(10%)	42(20%)	28(13%)	39(18%)
とても強く就きたい		41(43.6%)	12(12.8%)	26(27.7%)	9(9.6%)	6(6.4%)
・就きたい						
・どちらかとうと就きたい		36(34.3%)	7(6.7%)	15(14.3%)	7(6.7%)	7(6.7%)
・就けたらいい						

$\chi^2=22.16(8) \quad P<.001$

表3 クラスターの性差

学 年	クラスター	CL1	CL2	CL3	CL4	CL5
		85(40%)	21(10%)	42(20%)	28(13%)	39(18%)
男 子		28(39.4%)	3(4.2%)	15(21.1%)	10(14.1%)	15(21.1%)
女 子		57(39.9%)	18(12.6%)	26(18.2%)	18(2.6%)	24(16.8%)

$\chi^2=22.16(8) \quad P<.001$

表4 クラスターの学年差

学 年	クラスター	CL1	CL2	CL3	CL4	CL5
		85(40%)	21(10%)	42(20%)	28(13%)	39(18%)
2 学 年		50(45.5%)	11(10.0%)	24(21.8%)	14(12.7%)	11(10.0%)
3 学 年		28(37.3%)	7(9.3%)	9(12.0%)	7(9.3%)	24(32.0%)
4 学 年		4(16.0%)	3(12.0%)	8(32.0%)	6(24.0%)	4(16.0%)

$\chi^2=24.07(8) \quad P<.01$

34.3%)に属する学生が多く、強い就職希望を持っていない学生はCL4 (9.6% vs 17.1%), CL5 (6.45 vs 27.6%)に属する学生が多いことを示している。つまり、希望職業への就業意欲の強さは、就職への統制感と能力・適性の保有感に支えられていることになり、逆にその弱さは、就職への無力感と努力の非保有感やその他の手段の非保有感から由来することが分かる。性別では特に顕著な差は見られなかった。次に学年別でもクラスターの差異が認められた ($\chi^2=24.07, p<.01$)。つまりCL1は2学年に多く(45.5%), CL3は4学年(32.0%), 2学年(21.8%)に多く見受けられた。反対にCL4(24.0%)は4学年, CL5(32.0%)は3学年に多く見受けられた。クラスターの学年差などは、今後被調査者を増やし再検討の必要がある。

4) 職業的発達尺度の因子分析

職業的発達尺度は望月(1991)の職業的発達の代表的な項目を抜粋して使用したことで、沖縄県の教育的な特徴を考慮して、因子分析を実施した。共通性の低い項目を削除して、4因子が抽出された(表5)。

第1因子は、「職業生活を通して達成したい人生目標について考えたことがある」「自分の将来や夢や希望を実現するための計画について考えたことがある」「将来の職業生活で成功する条件を考えたことがある」「いろいろな職業の中で自分が持っている目標を達成できるかどうか考えたことがある」等の他、同様の5項目に負荷する「目標・達成志向」の因子と命名できる。第2因子は、「やる気になって学習や仕事をすると効果が上がると思ったことがある」「いろいろな仕事をするとき、その目的がはっきりしていると効果が上がると思ったことがある」「学習や仕事をしていてうまくやれたときは、『自分を生かせた』と思ったことがある」等の他、5項目に負荷している。「勤労効果の自覚」の因子と命名できる。第3因子は、「公平に扱ってもらうために、仕事の評価の基準をはっきり知りたいと思ったことがある」「同じことをしていても他の人だけがほめられると不公平だと思ったことがある」「自分の行動がことばや褒美で評価されたと思ったことがある」

「周りの人から計画的にやり遂げることで認めてもらいたいと思ったことがある」等の他、5項目に負荷している。評価されることに注意が集中している「社会的評価志向」の因子と考えられる。以上の3つの因子は望月(1991)の「職業的自己実現志向」「社会的職業的役割の検討」「社会的評価基準の理解」に対応していると思われる。第4因子は、「自分の経済的な生活を自分で管理するためにはどうしたらよいかを考えたことがある」「経済的に満足する生活をするためには、どうしたらよいかを考えたことがある」「自分の能力や性格に合った仕事はどんな仕事かを考えたことがある」という3項目に負荷する「経済安定志向」の因子と思われる。しかしこの因子は望月

表5 職業的発達尺度の因子分析

項目番号	因子1	因子2	因子3	因子4
b1	.5315			
b2	.5461			
b3	.6347			
b4	.7211			
b5	.5986			
b6	.5596			
b7	.6556			
b8		.4764		
b9	.4442			
b10				.7082
b11				.7492
b12				.4909
b13		.5151		
b14		.6571		
b15		.7706		
b16		.5971		
b17		.6193		
b18		.6208		
b21			.4623	
b22		.4404	.4168	
b23		.4915		
b24	.4915			
b25			.4746	
b26			.4575	
b27			.4845	
b28			.5112	
b29			.3976	
b30			.3704	
b33			.4820	
固有値	4.0188	3.9975	2.2375	2.1430
%	12.9%	12.8%	7.2%	6.9%

(1991) では抽出されておらず、島袋 (1998) の指摘した高校生における労働価値観の「仕事の外面性」の中の安定志向の強さに関係していると予測される。4つの因子で全分散の39.8%が説明されている。

5) キャリア CAMI と職業的発達、非現実感の関係

キャリア CAMI の各因子と「希望職種への希望の強さ」「職業的発達」の4因子はどのような関係にあるだろうか。その関係を相関係数 ($p < .05$) で示したのが表6である。

表6の結果から、キャリア CAMI の「就職への無力感」は職業への希望の強さ、職業的発達の「目標達成志向」「勤労効果の検討」と負の相関を示しており、また非現実感 (状態)、非現実感

(特性) とは正の相関を示している。このような結果から、大学生や専門学校生において近い将来の就職への見通しが持てないことが、意欲や感情レベルでも職業的な発達のレベルでも問題を抱えていることを予測させている。多分にエリクソン、E (1955) の指摘している自我同一性拡散に関係している。それとは反対に「就職への統制感」は「目標達成志向」「勤労効果の検討」と正の相関を示しており、希望通り就職できるという大学生や専門学校生の見通しや意欲が、職業的発達に支えられていることを伺わせている。しかし、「就職への統制感」の高さは、2つの非現実感尺度と無相関であり、現実感を生み出していないのはなぜであろうか。それは多分に、手段保有感で自己の行動のコントロールに直接関係する「努力の保有感」が現れていないことに関係していると思われる

表6 キャリアCAMIと希望職種への強さ、職業的発達、非現実感との相関

キャリア CAMI	希望職種への強さ	目標・達成志向	勤労効果の検討	社会的評価志向	経済安定志向	非現実感 A (状態)	非現実感 B (特性)
就職への無力感	-.304	-.201	-.326			.258	.224
就職への統制感	.219	.209	.259				
努力の非保有感	-.408	-.303	-.459		-.233	.244	.258
運の非保有感	-.291	-.156	-.318				
能力・適性の保有感	.160	.391					
友人の支援の非保有感	-.255	-.314					
大学の支援の非保有感	-.219		-.274				
未知の原因			-.296				
運の認識			-.225				
能力の認識							
努力の認識							
支援の欠如の認識							

る。多くの場合、学生は「就職への統制感」を活動的・行動的な「努力」ではなく「能力・適性」の高さの自己理解で支えることが考えられ、自分の行動やその目的や対象に実感・感情が湧きにくいことを予測させている。

では次に手段保有感は職業的発達および非現実感とどのように関係しあっているだろうか。

予測されたように「努力の非保有感」は「職業への希望の強さ」と高い負の相関を示し、職業的発達の「目標達成志向」「勤労効果の検討」および「経済安定志向」と負の相関を、かつ2つの非現実感尺度とは正の相関を示している。「運の非保有感」も努力の非保有感と同じ方向で負の相関が見られるが、しかし「運の非保有感」は2つの非現実感尺度とは無相関であり、自己防衛的な役割を果たしている傾向もある。

唯一の保有感である「能力・適性の保有感」は職業的発達の「目標達成志向」とのみ正の相関を示しているが、「勤労効果の検討」とは無相関である。つまり大学生や専門学校生の捉える「能力・適性の保有感」は「勤労効果の検討」とは無関係に成立している。そして「職業への希望の強さ」と正の相関を示すがかなり低い相関である。このような結果から、大学生の就職への統制感を支える「能力・適性の保有感」はそれほど職業的発達と結びついていないことが考えられる。

そして、「友人の支援の非保有感」「大学の支援の非保有感」も当然のことながら、「職業への希望の強さ」、職業的発達の「目標達成志向」と負の相関を示している。

手段の認識では、「未知の原因」「運の認識」が職業的発達の「勤労効果の検討」と負の相関を示し、職業や就職への無関心は「勤労効果の検討」の低さにつながっている。しかし、全体的な傾向として、キャリア CAMI の手段の認識の各因子は、「職業への希望の強さ」、「職業的発達」および「非現実感」と無相関を示している。社会や大学の中にある職業や就職に関する情報が、彼らの職業や就職に対する意識・態度および動機として十分な影響を与えるものではないことが予測される。

6) キャリア CAMI サンプルクラスター別・動機別職業的発達

キャリア CAMI による各サンプルクラスターの特徴を先に因子分析した職業的発達と非現実感で説明するために、クラスターと職業希望の強さの2要因による分散分析を実施した(表7)。

表7の結果から、職業的発達の2つの因子でクラスターと動機の2要因の主効果が確認された。まづ「目標・達成志向」ではクラスターの要因の $F(4/187)=5.0$ ($P<.001$ 、動機の $F(1/187)=5.27$ ($P<.001$) となり、下位検定の結果、クラスター別ではCL3 ($\bar{X}=33.5$) の得点が最も高く、CL2 ($\bar{X}=29.1$) とCL5 ($\bar{X}=27.9$) の得点が最も低くなっている。職業動機別では、高群 ($\bar{X}=32.2$) の得点が低群 ($\bar{X}=29.7$) を上回っている。次に、「勤労効果の自覚」の因子では、クラスターの要因の $F(4/188)=8.09$ ($P<.001$)、職業動機の要因の $F(1/188)=2.82$ ($P<.10$) となっている。下位検定の結果、クラスター別では、CL3 ($\bar{X}=42.5$) とCL2 ($\bar{X}=42.0$) の得点が最も高く、CL4 ($\bar{X}=38.9$)、CL5 ($\bar{X}=37.2$) の得点が最も低くなっている。職業動機別では、高群 ($\bar{X}=41.5$) の得点が、低群 ($\bar{X}=39.4$) の得点を上回っている。社会的評価志向、経済安定志向では、クラスター間、及び職業動機間で有意な差は確認されなかった。以上の結果から、先に確認された他者との相互作用の中で就職・職業を考えているCL3の学生は、「目標・達成志向」が高く、かつ「勤労効果の自覚」の程度も高いことが確認された。そして、希望職業への動機の強さがさらに「目標・達成志向」と「勤労効果の自覚」を高めていることが確認された。次に、クラスター間、希望動機の要因によって現実感に差があるかどうか検討した。その結果非現実感尺度(状態)のクラスターの要因の主効果の傾向が認められた($F(4/190)=2.12$, $P<.10$)。下位検定の結果、CL5の非現実感の得点がCL3より高いことが明らかになった。

以上に検討してきたように、将来の職業選択や就職に関して、自らの努力と他者の援助をを有し、能力と適性の保有感でもって、就職への自信・意欲を形成している学生(CL3)に、目標・達成志向と勤労効果の発達が見られ、また現実感の高い

方向にあることが分かった。反対に就職に向けて 目標達成志向、勤労効果の自覚が低く、かつ非現実のすべての保有感の欠如している学生 (CL5) は、 実感の高いことが確認できた。

表7 クラスターと希望職業動機による職業的発達

		ク ラ ス タ ー					希 望 職 業		CL : F 値	動機F 値
		CL1	CL2	CL3	CL4	CL5	動機高群	動機低群		
目標達成志向	平均	31.5	29.1	33.5	30.3	27.9	32.2	29.7	5.00***	5.27*
勤労効果の検討	平均	40.8	42.0	42.5	38.9	37.2	41.5	39.4	8.09***	2.82+
社会的評価志向	平均	32.3	31.5	32.4	31.5	31.7	31.9	32.1	0.29	0.24
経済安定志向	平均	12.6	11.7	12.9	12.8	11.9	12.8	12.1	1.49	1.65
現実感 (状態)	平均	23.6	20.7	20.2	19.0	25.6	20.9	23.7	2.12+	2.37
現実感 (特性)	平均	19.3	16.4	15.0	17.2	20.8	16.5	19.6	1.47	2.41

+ P<.10 * P<.05 ***P<.10

7) 要 約

本研究は、キャリア CAMI を用いて、大学生・専門学校生の「就職への統制感」と「就職への無力感」がどのような就職・職業に向けての自己理解に由来するかというパターンの解明を中心として分析・考察してきた。

主な結果は、

1. 就職への統制感は能力と適性の保有感のみに由来し、努力や能力、他者の支援の理解から来ている。
2. 就職への無力感は、努力の非保有感、運の非保有感、他者の支援の非保有感に由来し、その背後には一般的な他者の就職は運次第、分からないという考え方から発生してきている。
3. サンプルクラスター分析の結果、はっきりと1のパターンを示すグループは、全体の20%と予測され、反対に2のパターンを示すのも約20%であった。
4. 大学生・専門学校生の持つ「就職への統制感」「就職への無力感」は、職業的発達の「目標・達成志向」「勤労効果の検討」の発達・未発達と関係する。

5. 努力の非保有感、運の非保有感は職業的発達の「目標・達成志向」「勤労効果の検討」と負の相関を示す。しかし「能力・適性の保有感」は「目標・達成志向」とのみ正の相関を示す。

以上の結果から、大学生・専門学校生の持つ「就職への統制感」は主に目標形成に関わっており、職業の性質や活動の特徴の理解には関わりの弱いことが指摘できる。また「就職への無力感」は「目標・達成志向」「勤労効果の検討」の未熟さに関係している。その未熟さは一般的な職業の性質、目標達成する過程に関する無理解に由来していることがうかがえる。そのような意味で学生に職業や就職に関する情報提供を中心とした進路指導・就職指導が必要になってくると言える。

引用文献

- Erikson, E. H. 1955 (小此木啓吾訳編) 自我同一性誠信書房
- 唐澤真弓, 宮下孝弘, 東洋 1993 学習意欲と原因帰属に関する国際比較研究-CAMI による調査 (中間報告) - 発達研究, 9, 87-98.

- 岸本琴恵 2002 大学生・専門学校生の職業意識の発達について 日本進路指導学会主催 第20回進路指導研究セミナー大会
- 望月葉子 1991 職業的発達過程の類型化の試み—仕事への志向性と心理・社会的発達との関連から— 教育心理学研究 39, 57-66.
- 島袋恒男 井上 厚 1996 キャリア CAMI による大学生の職業意識の分析 琉球大学教育学部紀要 第49集 171-187.
- 島袋恒男ほか 1998 調査に見る沖縄県高校生の将来の職業選択と進路意識の特徴と問題点「平成10年度 進路指導」 沖縄県教育庁 21-35.
- Skinner, E. A., Chapman, M., Baltes, P.B. 1988 Control, means-end, and agency beliefs : A new conceptualization and its measurement during childhood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 117-133.
- Skinner, E. A. 1993 Development and perceived control : A dynamic model of action in context. In M. Gunnar & L. A. Sroufe (Eds.), *Self Processes and Development. The Minnesota Symposia on Child Psychology*. Vol.23, 167-216.
- 須永範明 1996 非現実感質問紙の作成 心理学研究 67, 86-93.